

源氏物語ことはじめ

山内 裕子

平成二十七年七月二十七日

卯月、五島美術館に赴き國寶「源氏物語繪卷」を見る。平安宮中の雅、四季折々の喜び哀しみ細やかに寫し表せし名品よくぞ今に傳はる。千年に亙り培はれたる貴族文化あまねく廣がりて庶民の暮しまで豊かに彩り、繊細なる感性を養ふこと、いと素晴らし。

數年前、源氏物語千年紀の祝あり。長篇故に敬遠しぬたるも此度、與謝野晶子の源氏に親しみ小林秀雄『本居宣長』にて「もののはれ」論を繙く。されど源氏物語の主題は何か、容易に摺み難し。

偶々ラジオにて放送大學の島内景二氏説く物語論を聞く。何故に源氏物語は傑作か。理想的人物たる光源氏は柏木の密通、紫の上の死に苦惱し出家、物語の主役を降る。後編「夢の浮橋」にて運命に弄ばれたる浮舟、遂に中將も薫も決然と拒否する意思を持つ。不條理なる物語に生き、死を覺悟したる後、蘇生し沈黙する浮舟の、恐らくこの先に眞實の言葉を發見する豫感にて終る。己が人生を自ら選擇する決意に至る浮舟の成長に注目、現代に通ずる讀みの一なり。浮舟の意志の微かなる表れに命の輝きを感じず。家や社會の縛りのなかに生くる女の儚き運命を直視し見守る紫式部の慈眼に氣附く。

源氏物語の卷の名たる帚木といふ高木は近きより見上ぐるとき氣附かず遙か彼方より見るや姿を現すといふ。信州伊那谷のハナノキ別名帚木の散り敷きたる紅葉の落ち葉の美しさも格別なり。源氏物語に因む名所舊跡も尋ねたし。楽しみこよなく廣がる。

(平成二十七年八月十二日受附)